『東京大学言語学論集』37 (2016.9) e69-e79

ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B384 について*

荻原裕敏

キーワード: トカラ仏教　ウイグル仏教　ベゼクリク　誓願図　«*Nandīpālasūtra*»

要旨

トゥルファン・ベゼクリク第 20 窟の回廊には 15 面の誓願図が描かれていた事が知られており、そのそれぞれの誓願図の上部にはブラーフミー文字によるサンスクリット題記が書かれ、当該の誓願図の内容を説明するものとなっている。これらのサンスクリット題記は 1913 年に Lüders によって初めて内容比定が提出され、(根本)説一切有部に関連する事が明らかにされたが、その内の第 10 面の誓願図には、ウッタラという婆羅門青年がカーシャパ仏の下に出家する決心をした物語が描かれている。本稿では、ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B384 がこの物語に比定される点を論じると共に、当該のトカラ語 B 断片が、同じ物語を扱った古代ウイグル語断片及びベゼクリク第 20 窟誓願図第 10 面と共通する内容を有している点を指摘する。筆者の比定が正しければ、トカラ語 B 仏典とベゼクリク第 20 窟誓願図との間に共通の思想的基盤が存在していた事を、トカラ語文献学の側から裏付ける事となる。

1. 導入

『東京大学言語学論集』第 37 号所収の拙稿(荻原 2016a)で、筆者はベゼクリク第 20 窟誓願図第 5 面に附されたブラーフミー文字題記がサンスクリットではなく、トカラ語であると考えられる点を指摘した。この誓願図が(根本)説一切有部の系統に属する点は、既に先学が指摘するところである[1]。トカラ仏教の部派帰属は(根本)説一切有部であるため、ベゼクリクの誓願図はトカラ仏教の影響を反映していると考えられているだけでなく、近年の仏教美術研究からは、トゥルファンの誓願図はクチャのトカラ仏教に由来するという解釈が提出されており、ベゼクリクの誓願図とトカラ語仏典との関連は検討に値する課題ではあるが、トカラ語仏典研究に伴う様々な問題により、トカラ語仏典と西域北道の仏教美術の体系的な比較を行う事が困難な状況であるのが現実である。

一方、未公開であったトカラ語文献の写真の公開や新資料の発見など、近年の研究状況の大幅な改善に伴い、トカラ語仏典と古代ウイグル語仏典との比較研究が以前よりも重要となりつつあり、重要な研究成果が提出されている[2]。インド系借用語の語形やトカラ語仏

* 本稿執筆に際して、貴重な研究成果を快くご提供下さった八尾史博士並びに関連する資料の収集にご協力頂いた笠井幸代博士に深く感謝申し上げる。

[1] ベゼクリク第 20 窟及び同窟の誓願図については、荻原 (2016a) で引用した先行研究を参照。

[2] トカラ語仏典と古代ウイグル語仏典との比較研究は枚挙に暇がないが、差し当たり Kasai et al. (2013) 所収の諸論考を参照されたい。

典を原典としていたと考えられる文献が複数知られている事から、ウイグル仏教はトカラ仏教を継承したと考えられてきたが、トカラ仏教とウイグル仏教の関連を示す新しい資料として、本稿ではドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B384 について検討すると共に、ベゼクリク第 20 窟誓願図との関連についても言及する。

2. ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B384 について

ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B384 は、1953 年に *TochSprR(B)* II: 254-255 で初めてローマ字転写が出版された断片である。現在ではドイツ・ベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) に所蔵されており、THT384 という登録番号が附されている (先行研究との繋がりを考慮し、B384 と称する)。この断片は状態が悪く、これまで内容に関して言及される事はなかったが、荻原 (2016b: 275 注 19) で言及したように、筆者はこの断片が蔵訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』にのみ引用される«*Nandīpālasūtra*»に比定される事に気付いた。本節ではこの断片の比定について検討する。

この断片はトゥルファンのセンギムで発見されたものであり、サイズは横 11.7×縦 6.2cm である。文字特徴には Archaic のものは見られず、<ta>と<na>は区別される[3]。このテクストの言語特徴を Peyrot (2008: 221) は Classical Tocharian B に分類している。断片の写真は TITUS 及び CEToM のサイトで確認可能である。紐穴右側の一部のみが残っているため、葉数は不明であるが、*TochSprR(B)* II: 255 は韻文の番号から B385 が直接後続する断片であると指摘している[4]。また、*TochSprR(B)* II: 254 に述べるように、全体は韻文で書かれており、断片に見られる記載と音節数から第 17-27 詩節を含むと考えられる。以下、断片のローマ字転写・音素転写及び和訳を与えるが、新たに読む事ができた部分があるため、ここで与える筆者の転写は *TochSprR(B)* II 及び同書に基づく CEToM のものとは一部異なっている[5]。

[Transliteration]

a

1　　///– – {– – – – – – –} – (·)·*[p]*· ///

2　///– *dh[i]sātweṃts w· k· tsñ· w· ·k· ltse* † *kalpa taka* (·)*ṣkñ*· ///

3　///*o*̲*t*̲ | *uttareṃśco te weña* † *pācer mācer ñi meṅki pi[lk]*· ///

4　///*ñke tnek yarpo yāmmar ka* *s*̲*p*̲ | 18 *lant* = *we ostameṃ mā [ln]*· ///

---

[3] トカラ語 B 文献を書写する際に用いられるブラーフミー文字の内、Archaic に属するとされるものについては、Malzahn (2007) を参照。また、Tamai (2011: 4) は当該断片を II-2 に分類しており、同書 416-417 頁の結論から、この断片を 9 世紀以降のものと見做していると推定される。なお、本稿で言及する B401 も同様に分類されている。

[4] B385 が先行する B384 と同じ物語に属しているかについては、B385 の損傷が激しく判断できない。

[5] 以下の転写では下記の転写方式を採用する。

[ ]: 破損によって読みが不確定な箇所　　( ): 筆者によって推定された箇所
·: *akṣara* の欠けている子音若しくは母音　　///: 写本の破損箇所
†, ‡: 断片中の punctuation　　{ }: 破損によって推定された欠落部分
=: sandhi

5 /// *nts[e] śāsanne † tāka ṣamāne ike śpālmeṃ ostaṣ[ṣ]e* ///
6 /// *dhisātwentso sa ·i ·(·)e [n]ta er[ṣa]lye † l(·)ā* ///
7 /// *m(·)· [t](·)· – {– – – – – –} [l](·)· –* ///
b
1 /// *[l]· kl· – – {– –} – (·)[k]· –* ///
2 /// *– [mā]skaicce po[y]ś· ññ· kr$_u$i nta kalloym n· ·[y]· – –* ///
3 /// *[t]sārwästsi* 23 *wñ[ā]neś cäñcareṃ brahmasvarsa w[e]ksa ce$_u$* ///
4 /// *··e p[i]kwala śāmnaṃts śaulne iśāmna kār[p]at ṅke* 24 ///
5 /// *ñäś^{ä} ompostaṃ ka snai epiṅkte tākat [tw]e † śā[kya]muni* ///
6 /// *[t]esa wās·· ·(·)i – – t(·)e [ma]kte – – [kca] ·[c]· [c]au* ///
7 {missing}

[Transcription]

a
1 /// *– – {– – – – – – –} – (·)·[p]·* ///
2 /// *(bo)dh[i]sātweṃts w(a)k(ī)tsñ(e) w(ät)k(ā)ltse † kalpa taka(r)ṣkñ(e)* ///
3 /// *ot uttareṃśco te weña † pācer mācer ñi meṅki pi[lk](o)* ///
4 /// *ñke tnek yarpo yāmmar ka ṣp* 18 *lant = we ostameṃ mā [ln]·*(1) ///
5 /// *nts[e]*(2) *śāsanne † tāka ṣamāne ike śpālmeṃ ostaṣ[ṣ]e* ///
6 /// *(bo)dhisātwentso sa(rr)i(w)e[n]ta*(3) *er[ṣa]lye † l(·)ā* ///
7 /// *m(·)· [t](·)· – {– – – – – –} [l](·)· –* ///
b
1 /// *[l](a)kl(e) – – {– –} – (·)[k]· –* ///
2 /// *(a)[mā]skaicce po[y]ś(i)ññ(e) kr$_u$i nta källoym n·*(4) *·[y]· – –* ///
3 /// *[t]sārwästsi*(5) 23 *wñ[ā]neś cäñcareṃ brahmasvarsa w[e]ksa ce$_u$* ///
4 /// *(kant)e*(6) *p[i]kwala śāmnaṃts śaulne iśāmna kār[p]at ṅke* 24 ///
5 /// *ñäś ompostäṃ ka snai epiṅkte tākat [tw]e † śā[kya]muni* ///
6 /// *[t]esa wās(kats)i – – t(·)e [mä]kte – – [kca] ·[c]· [c]au* ///
7 {missing}

［注釈］

(1): 当該断片に関する筆者の比定に従えば、この部分には *lät-* 'to go out'の一人称単数現在形能動態である*[ln](askau)*が推定される。

(2): *TochSprR(B)* II: 254, fn. 5 は(*pudñäkte*)*nts*(*e*)を推定する。

(3): Adams (2013: 741) では'purpose, endeavor (?)'とされており、語義を確定する事はできないが、「誓願」に相当する語かも知れない。

(4): *TochSprR(B)* II: 254, fn. 9 は *n*(*emcek*)を推定するが、残存部分からはこの推定は支持されない。ただし、具体的な語形を推定する事は困難である。

(5): *TochSprR(B)* II: 254, fn. 9 は(*kaṣā*)*r* を推定するが、残存部分からはこの推定は支持されず、この部分は *tsārw-* '(K) to encourage, comfort'の不定詞である*[t]sārwästsi* と解読できる。

(6): 次節で言及する村上 (1984: 194) が指摘する漢訳『根本説一切有部毘奈耶出家事』所引のウッタラの誓願には「人壽百歳」とある事から、Toch.B *kante* 'hundred'が推定される。Vogel and Wille (1996: 265-266, 294-295) によって出版されたギルギット近郊発見のサンスクリット写本に見える対応箇所 Skt. *yan mayā bhagavati kāśyape samyaksaṃbuddhe {yā} yāvadāyur brahmacaryaṃ caritaṃ na ca kaścid guṇagaṇo 'dhigataḥ anenāhaṃ kuśalamūlena yo 'sau bhagavatā kāśyapena samyaksaṃbuddheno=ttaro nāma māṇavo vyākṛto bhaviṣyasi tvaṃ māṇava* ***varṣaśatāyuṣi prajāyāṃ*** *śākyamunir nāma tathāgato 'rhaṃ samyaksaṃbuddha iti tasyāhaṃ śāsane pravrajya sarvak(l)egaprahāṇād arhatvaṃ sākṣātkuryām iti.* 'That I practised lifelong holy conduct under the exalted (and) perfectly enlightened Kāśyapa and did not gain any large number of virtues — by (reason of) this root of merit I wish to be initiated, and to realize Arhatship through abandonment of all depravities, in the teaching of that brahmin youth named Uttara about whom the exalted (and) perfectly enlightened Kāśyapa prophesied, «You, brahmin youth, will be a Sākyamuni by name, a Tathāgata, an Arhat, a perfectly enlightened one, **when people will have lives of a hundred years**.»' も参照[6]。

[和訳]

a

1　[和訳不能]

2　[...] 菩薩達の顕著な優越さが [...] 彼は信仰心を抱いた [...]

3　[...] そこでウッタラにこのように言いました。私の父と母は目が見えない [...]

4　[...] 今、私は善行のみ行おう。//18// あなたは出家すべきである。(私は出家) しない [...]

5　[...] 仏陀の教えにおいて [...] 彼は僧侶になった。素晴らしき場所、家の [...]

6　[...] 菩薩達に対する誓願(?)を起こすべきである。[...]

7　[和訳不能]

b

1　[...] 苦しみ [...]

2　[...] (得)難い仏果をもし私が得られるならば [...]

3　[...] 励ますために [...] //23// 彼は彼にこの妙なる声である *Brahmasvara* で言いました。[...]

4　[...] 人々の寿命が(百)年の際にあなたは衆生の下に降りるだろう。//24// [...]

5　[...] 私に続いてあなたはすぐに現れるだろう。釋迦牟尼 [...]

6　[...] それによって、動くこと [...] のように [...]

7　[欠落]

---

[6] 漢訳『根本説一切有部毘奈耶出家事』巻二「我所修行梵行功德，以此善根，願迦葉波佛與彼嗢怛囉婆羅門，當來世時，**人壽百歳**有佛出世，號曰釋迦牟尼應正等覺，十號具足，於彼教中而得出家，斷諸煩惱乃至漏盡，證阿羅漢果。」(T.23, no. 1444, 1030a4-8) に対応する。

この断片は a3 にウッタラという名前が、また b5 に釋迦牟尼が見られる以外、内容を比定する手がかりを持たないが、筆者には a2-5 が蔵訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』に引用される根本説一切有部の『中阿含経』に属する«*Nandīpālasūtra*»と一致した記述を示しているように思われる[7]。なお、この経典はサンスクリット及び漢訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』では省略されており、蔵訳にのみ全体が引用されているため、ここでも蔵訳との比較を試みる。以下に関連する部分を引用するが、B384a2-5 の内容理解に資する部分には下線を附している。この部分は、正等覚者カーシャパに帰依する陶工ナンディーパーラが婆羅門青年ウッタラをカーシャパの下に連れて行き、説法を聴かせる事でカーシャパに帰依させ、出家させる場面である[8]。

「(a2)それから正等覚者カーシャパは婆羅門青年ウッタラを法をそなえた話によって教えさとされ、はげまされ、奮起させられ、歓喜させられた。多くの方法で法をそなえた話によって教えさとされ、はげまされ、奮起させられ、歓喜させられてから、沈黙された。それから婆羅門青年ウッタラは陶工ナンディーパーラにこのように言った。『温厚な人ナンディーパーラよ、あなたはこのような法と律を聞いたなら、どうして正しい信仰によって家から家なしの生活へと出家しないのか』『(a3-4)温厚な人ウッタラよ、わたくしがこのように盲目の両親を養い、正等覚者カーシャパにしばしば施食を捧げているのをあなたは知らないのか。温厚な人ウッタラよ、あなたが出家しなさい。わたくしはひとまず出家すまい』

それから正等覚者カーシャパに陶工ナンディーパーラはこのように申しあげた。『大徳よ、この婆羅門青年ウッタラがよく説かれた法と律において出家、具足した比丘の身分を獲得するように、世尊は憐憫を垂れて出家させ、具足させてくださいますように』

(a5)婆羅門青年ウッタラはよく説かれた法と律において出家、具足した比丘の身分を獲得したものとなった。」

上記引用部分から、B384a2-5 が«*Nandīpālasūtra*»に比定される事が窺える。また、同じくセンギムで発見された THT387.frg.i.b4 にもウッタラという名前が見えており、B384 と同様に«*Nandīpālasūtra*»に比定される可能性が高い。THT387.frg.i は *TochSprR(B)* II: 256 に B387.3 として一部が公表されているのみであったため、この点は知られていなかった。以下に全体の転写を挙げて研究者の利用に供したい。

この断片のサイズは横 3.8×縦 4.8cm であるが、行間は 1.0-1.1cm となっており、先に見た B384 とほぼ同じであるだけでなく、この断片に見られるブラーフミー文字も B384 と同

[7] Panglung (1981) には、この物語に関する言及は見られない。

[8] ここでは蔵訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』の和訳を八尾 (2013: 520-521) より引用する。蔵訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』に引用された«*Nandīpālasūtra*»については同書 518-524 頁を、この仏典のパラレルについては Ehlers (1982: 176) 及び村上 (1984: 195-196)・八尾 (2012: 303-304) を参照。また、若干の相違は見られるが、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』にもこの物語のパラレルの存在が指摘されている。

じ類型に属するものである。また、THT387.frg.i.b5 には//26//と解読できる箇所があり、この読みが正しければ、THT387.frg.i は B384 と同一の folio に属していた事になる。ただし、B384 との間にどの程度の欠落が存在していたかについては、推定不能である。

[Transliteration]

a	b
1 *///p·　laiknents·///*	1 *///·s·　–///*
2 *///–　tainaiṣañ̈ä\ ///*	2 *///–　lme[ṃ]　śau　–///*
3 *///–　añma　–///*	3 *///lk　ritau　l(·)[au]///*
4 *///mā　ñäś\　[u]///*	4 *///–　uttare　‡　k·///*
5 *///–///*	5 *///–　[26]　pya　·(·)[ai]///*

[Transcription]

a	b
1 *///p(e)laiknents(e)///*	1 *///·s·　–///*
2 *///–　tainaisäñ///*	2 *///(ono)lme[ṃ]　śau　–///*
3 *///–　añma　–///*	3 *///(akā)lk　ritau　l(·)[au]///*
4 *///mā　ñäś　[u]*(1) *///*	4 *///–　uttare　‡　k·///*
5 *///–///*	5 *///[26]　pya(py)[ai]*(2) *///*

［注釈］

(1): この部分には *u(ttare)*が推定されるが、具体的な格は不明である。

(2): *pyāpyo* 'flower'に属する語形が推定されるが、具体的な形式は不明である。

3. トカラ語 B 訳«*Nandīpālasūtra*»の位置づけについて

前節では、ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B384 が、蔵訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』にのみ全体が引用されている根本説一切有部の『中阿含経』に属する«*Nandīpālasūtra*»に比定される点を検討した。本節では、このトカラ語 B 訳が仏教史にどのように位置づけられるかを検討したい。

トカラ語 B 断片 B384 で重要な部分は、主人公ウッタラの成仏に対する誓願を述べた場面と見られる B384b2 及びそれを受けてカーシャパがウッタラに授記を与える場面であると考えられる B384b3-5 である。村上 (1984: 193-194, 229) に指摘されるように、蔵訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』に引用される«*Nandīpālasūtra*»ではウッタラの成仏に対する誓願とカーシャパによる授記についての言及は見られず、漢訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』及び『根本説一切有部毘奈耶出家事』においてウッタラの誓願とカーシャパによる授記について間接的な言及が認められるのみであり[9]、管見の限り、現在知られている«*Nandīpālasūtra*»

[9] 『根本説一切有部毘奈耶薬事』巻十八「汝等諦聽。乃往古昔，於無比聚落有一陶師名曰喜護，廣如中阿笈摩，王法相應品中説。汝等苾芻。於意云何。往昔之時無上摩納婆者，豈異人乎。我身是也。由我昔於迦

はウッタラの誓願とカーシャパによる授記について言及しない。

一方、«*Nandīpālasūtra*»にはEhlers (1982) によって出版されたムルトゥク発見の古代ウイグル語訳が知られており、トカラ語B断片B384と完全な一致を示す部分は見られないが、古代ウイグル語訳62-63行目には *burhan kutıŋa alkiš bultı*「彼は仏果に対する授記を得た」とあり、この部分はカーシャパが授記を与える場面と見られるB384b2-5に対応すると思われる。残念ながら、古代ウイグル語訳にはウッタラの成仏への誓願に関する記述は見られないが、カーシャパによる授記についての言及を有するという点で、トカラ仏教とウイグル仏教に共通する«*Nandīpālasūtra*»が知られていた事になり、同一の教義的背景を有していた事を示唆する[10]。

ここで注目すべきは、ベゼクリク第20窟誓願図第10面にこの物語が描かれている点である。この第10面の誓願図にはサンスクリットによる題記が書かれており、Le Coq (1913: Tafel 26), Lüders (1913: 256, 273), Huber (1914: 12) 及び村上 (1984: 190, 195) によって解読されているが、それらを総合すると、以下のようになる。

Skt. *uttaro māṇavo bhūvaṃ kāśyapo*(1) *dvipadottame*
na(nd)i(p)ālavaca śrutvā pravrajyāyā kṛtā matiḥ

(1): Lüders (op.cit.) に従い、*kāśyape* と読むべきである。

「私はウッタラという婆羅門青年であった。両足尊カーシャパの下に、ナンディーパーラの言葉を聞いてから、出家する決心をした。」

この題記には誓願や授記を示す語は見られないが、ベゼクリク第20窟誓願図を体系的に分析した村上 (op.cit.: 251-254) によれば、これらの壁画の主題は誓願と授記であるとされる。この観点から見た場合、第10面の誓願図にはウッタラの誓願とカーシャパによる授記が含意される事となる。先に指摘した通り、トカラ語B訳«*Nandīpālasūtra*»にはウッタラの誓願とカーシャパによる授記が見られた。誓願と授記に言及するという点において、ベゼクリク第20窟誓願図第10面が反映する思想は、トカラ語B訳«*Nandīpālasūtra*»とのみ一致しており[11]、現在知られている«*Nandīpālasūtra*»とは一致していないと言う事ができる[12]。ここで

攝波佛處説云，苦行未證具智。由斯業力，六年苦行不能證成無上等覺。我若當時於彼佛所而不追悔、願求當來等正覺者，縱更經三無數大劫修諸善品，猶未成佛。」(T.24, no. 1448, 96, b13-20) を参照。なお、『根本説一切有部毘奈耶出家事』については、前節トカラ語B断片B384に対する注釈で引用した。

[10] 古代ウイグル語訳がトカラ語B訳の抄訳である可能性はあるが、確定はできない。また、荻原 (2016b: 265-271) で指摘したように、«*Nandīpālasūtra*»はドイツ所蔵トカラ語B断片B401a1-3にも取り込まれているが、断片の破損によりウッタラの成仏への誓願とカーシャパによる授記の有無は判断できない。

なお、村上 (1984: 192-193, 195-196) に述べるように、この物語と同じく婆羅門青年がその友人である陶工によってカーシャパの下に連れて行かれ、出家するという物語は、原始仏典以来複数の仏典に伝えられているが、これらは誓願と授記には言及しない。ただ、この内«*Mahāvastu*»所収の«*Jyotipālasūtra*»及び後続する「*Jyotipāla* の授記 (*Jyotipālasya vyākaraṇa*)」と称される物語のみが、婆羅門青年の成仏への誓願とカーシャパによる授記を描写する。この *Jyotipāla* に関する二つの物語については、村上 (op.cit.: 198-228) 及び平岡 (2010: 215-236) を参照。

[11] 注10で指摘したように、この物語はドイツ所蔵トカラ語B断片B401a1-3にも在証されるが、ベゼクリ

検討したトカラ語 B 断片 B384 と古代ウイグル語断片は、ベゼクリク第 20 窟誓願図第 10 面に一致する所説がトゥルファンの仏教徒に知られていた事を示している。

なお、ベゼクリク第 20 窟誓願図とトカラ語 B 仏典が一致する所説はこれだけに留まらない。ベゼクリク第 20 窟誓願図第 9 面は宝髻仏(*Ratnaśikhin*)に対して燈明を布施する王女を主題とするが、村上 (op.cit.: 168-188) が言及するように、複数の仏典に見られるパラレルの内、ベゼクリク第 20 窟誓願図第 9 面のサンスクリット題記と同様に、王女が布施を行ったとする内容を示すのは『賢愚経』巻三「貧女難陀品」(T.04, no. 202, 370c-371c) のみである。しかしながら、センギムで発見されたドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B400a4-b1 が、サンスクリット題記と同様に、布施を行った人物を王女としている点が *TochSprR(B)* II: 266, fn.10 及び慶 (2010: 463-464, 490-491) によって指摘されている[13]。以下にベゼクリク第 20 窟誓願図第 9 面のサンスクリット題記(Le Coq 1913: Tafel; Lüders 1913: 256, 266-267; 村上 op.cit.: 169, 175)及び B400a4-b1 の転写と和訳を挙げるが、漢訳及び蔵訳『根本説一切有部毘奈耶薬事』との比較は荻原 (2016b) で行ったため、ここでは繰り返さない。

Skt. *rājña sutāham abhūvan pūrvam anyāsu jātiṣu*
bhr(āta)raṃ ratnaśikhisaṃ dipataila(1) *upasthitaḥ*
(1): 村上 (op.cit.) に従い、*ratnaśikhinaṃ dipatailam* と読み替える。
「昔、他の生において、私は王女であった。兄のラトナシキンに燈明の油が捧げられた。」

B400a4-b1: *ratnacuḍa ñemttsa miñcuṣka takāwa ṣer pudñä(kt)e(ntse)* † *ratnaśikhiṃ protri dipmāl yām[ṣa]wa śle [p](aka)ccāmpa* ‡ (1)
「*Ratnacūḍā* という名前の王女にして、仏陀の姉妹であった。私は兄弟である *Ratnaśikhin*(宝髻仏)に対して、布施と共に灯明を作った。//1// 」

ベゼクリク第 20 窟誓願図第 9 面のサンスクリット題記は王女の名前には言及しないため、トカラ語 B 断片 B400 と完全に一致しているか否かの判断はできないが、ここでは共通して「王女」とされている点が注意されるべきである。

本稿で扱ったトカラ語 B 断片 (B384, THT387.frg.i, B400) の発見場所が全てトゥルファンのセンギムである点及びベゼクリク第 20 窟誓願図第 9 面・第 10 面とトカラ語 B 仏典が共通する所説を語っている点を考慮すれば、ベゼクリク第 20 窟誓願図は当時現地で知られていた仏教思想を反映している事が裏付けられると同時に、根本説一切有部には現在知られている所説の他にも複数の伝承が行われていた事を示している。これは、その他のトカラ

ク第 20 窟誓願図第 10 面と同じ物語を主題とする点は *TochSprR(B)* II: 267, fn.9 に指摘されている。
[12] 村上 (op.cit.: 194-195, 229) は、注 9 で言及した漢訳の根本有部律に基づいて、根本説一切有部が誓願と授記を加えた物語を知っていた可能性を指摘しており、当該断片はこの可能性を裏付けるものと言える。
[13] ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B400 は、前述の B401 と同一の写本に属するものであり、共に『根本説一切有部毘奈耶薬事』に関連する内容を語っている。この二断片については、荻原 (2016b) を参照。

語仏典が反映する状況とも一致しており、西域北道の仏教美術はサンスクリット・パーリ・漢訳・蔵訳文献との比較だけでは十分に解明できず、現地で出土した文献資料との比較も極めて有効である事を物語ると同時に、出土文献の研究者も現地に見られる仏教美術に目を配る必要がある事を教えている。

4. 結論

本稿ではドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B384 が、根本説一切有部の『中阿含経』に属する«*Nandīpālasūtra*»に比定される点を検討すると同時に、当該断片の仏教史における位置づけを論じた。現在までに知られている«*Nandīpālasūtra*»とは異なり、このトカラ語 B 断片にはウッタラの成仏への誓願とカーシャパによる授記が述べられていたが、カーシャパによる授記については、同じくトゥルファンで発見された同仏典の古代ウイグル語訳にも言及されており、トカラ仏教とウイグル仏教に共通の思想的背景が存在していた事を推測させる。

一方、ベゼクリク第 20 窟誓願図第 10 面は、同様にウッタラの誓願とカーシャパによる授記を主題とし、トカラ語 B 断片 B384 及び(ウッタラの誓願についての言及は見られない点には留保が必要だが) 古代ウイグル語訳«*Nandīpālasūtra*»と一致していると言え、この地域で当時流布していた仏教思想を背景としていた事が裏付けられる。

また、ベゼクリク第 20 窟誓願図との一致という点は、宝髻仏(*Ratnaśikhin*)に対して燈明を布施する王女を主題とするベゼクリク第 20 窟誓願図第 9 面のサンスクリット題記とドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B400 にも確認される事から、トゥルファンで発見されるトカラ語 B 仏典とベゼクリク第 20 窟誓願図は教義的基盤を共有しており、先学による指摘に加えて、拙稿 (荻原 2016a) でも未解明であったベゼクリク第 20 窟誓願図第 5 面のブラーフミー文字題記に基づいて検討したように、11-12 世紀に成立したとされるベゼクリク第 20 窟誓願図にトカラ仏教の影響を見る事の妥当性を確認する事ができる。西域北道で行われていた仏教の実態の解明には、仏教美術や出土文献資料も含めた総合的な研究が必要である。

参考文献

Adams, Douglas Q. (2013) *A Dictionary of Tocharian B, revised and greatly enlarged*. Amsterdam: Rodopi.

CEToM = http://www.univie.ac.at/tocharian/?home.

Ching Chao-jung (2010) *Secular documents in Tocharian: Buddhist economy and society in the Kucha region*. Dissertation thesis. Paris: École Pratique des Hautes Études.

Ehlers, Gerhard (1982) Ein alttürkisches Fragment zur Erzählung vom Töpfer. *Ural-Altaische Jahrbücher*, Neue Folge 2: 175-185.

平岡聡 (2010) 『ブッダの大いなる物語　上　梵文「マハーヴァストゥ」全訳』東京: 大蔵出版.

Kasai et al. (2013) = Y. Kasai, A. Yakup and D. Durkin-Meisterernst (eds.) *Die Erforschung des*

Tocharischen und die alttürkische Maitrisimit. Turnhout: Brepols.

Le Coq, Albert von (1913) *Chotscho: Facsimile-Wiedergaben der wichtigeren Funde der ersten königlich preussischen Expedition nach Turfan in Ost-Turkistan.* Im Auftrage der Generalverwaltung der königlichen Museen aus mitteln des Baessler-Institutes. Berlin: D. Reimer.

Lüders, Heinrich (1913) Die Praṇidhibilder im neunten Tempel von Bäzäklik. *Sitzungsberichte der Königreich preussischen Akademie der Wissenschaften* 2: 864-884. Repr. In: *Philologica Indica: Ausgewählte kleine Schriften von Heinrich Lüders.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1940, 255-274.

Malzahn, Melanie (2007) The most archaic manuscripts of Tocharian B and the varieties of the Tocharian B language. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta tocharica.* Heidelberg: Winter, 255-297.

村上真完 (1984) 『西域の仏教: ベゼクリク誓願画考』東京: 第三文明社.

荻原裕敏 (2016a) 「ベゼクリク第 20 窟誓願図のトカラ語題記について」『東京大学言語学論集』第 37 号.

荻原裕敏 (2016b) 「『根本説一切有部律薬事』に関連する二点のトカラ語 B 断片について」荒川正晴・柴田幹夫(編)『シルクロードと近代日本の邂逅: 西域古代資料と日本近代仏教』東京: 勉誠出版, 258-276.

Panglung, Jampa Losang (1981) *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung.* Tokyo: The Reiyukai Library.

Peyrot, Michaël (2008) *Variation and change in Tocharian B.* Amsterdam: Rodopi.

T. = *Taishō Tripiṭaka.*

Tamai Tatsushi (2011) *Paläographische Untersuchungen zum B-Tocharischen.* Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.

TITUS = http://titus.fkidg1.uni-frankfurt.de/texte/tocharic/tht.htm.

TochSprR(B) II = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1953) *Tocharische Sprachreste. Sprache B.* Heft 2. Fragment Nr. 71–633. Aus dem Nachlass hrsg. von Werner Thomas. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Vogel, Claus and Klaus Wille (1996) The final leaves of the Pravrajyāvastu portion of the Vinayavastu manuscripts found near Gilgit: Part 1 Saṃgharakṣitāvadāna. In: Gregory Bongard-Levin, Daniel Boucher, Fumio Enomoto et al. (eds.) *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen III.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 243-296.

八尾史 (2012) 「『根本説一切有部律』「薬事」における経典「引用」の諸相(三)–附・逆引き経典対応表」『仏教研究』第 40 号: 303-304.

八尾史 (2013) 『根本説一切有部律薬事』東京: 連合出版.

Tocharian Fragment B384 of the Berlin Turfan Collection

Ogihara Hirotoshi

Keywords: Tocharian Buddhism, Uyghur Buddhism, Bezeklik, Praṇidhi scene, *Nandīpālasūtra*

Abstract

This paper aims to provide a novel interpretation of Tocharian fragment B384, housed in the Berlin Turfan collection. The identification of this fragment found in Turfan to the *Nandīpālasūtra* was made possible by a reference to this story, which was narrated in its full only in the *Pravrajyāvastu* of the *Mūlasarvāstivādavinaya* in Tibetan. It is noteworthy that the Tocharian B version mentions the vow of the Buddhahood uttered by Uttara and Kāśyapa's prophecy of Uttara's attainment of the Buddhahood. These two incidents are not narrated in the *Nandīpālasūtra* thus far known to the scholarly world, with the exception that the Old Uyghur version of this story unearthed in Turfan only mentions Kāśyapa's prophecy of Uttara's attainment of the Buddhahood. This fact alludes that the *Nandīpālasūtra* slightly different from that now available to us would be known to Tocharian Buddhism and Uygur Buddhism in Turfan.

It is also worthy of mention that the *Nandīpālasūtra* in Tocharian B can be related to the Praṇidhi scene No. 10 in the Bezeklik Cave No. 20, in that the vow of the Buddhahood uttered by Uttara and Kāśyapa's prophecy of Uttara's attainment of the Buddhahood are depicted in this mural painting. If my interpretation of B384 as a part of the *Nandīpālasūtra* is correct, it confirms that the Praṇidhi scenes in the Bezeklik Cave No. 20 could reflect that the doctrine of Tocharian Buddhism prevailed in Turfan during the 11th and 12th centuries, when these Praṇidhi scenes were depicted in the Bezeklik Cave No. 20.

（おぎはら・ひろとし　京都大学白眉センター/文学研究科）